

# 訪日ムスリム観光客へのおもてなし対応の場 における日本人の異文化理解： ムサッラーを事例として

## Intercultural Understanding in Japanese Hospitality for Foreign Muslim Tourists: Case of al-muṣallā

小村明子  
KOMURA Akiko



**Key words:** 日本のイスラーム、ムスリム観光客、礼拝室、日本人ムスリム  
Islam in Japan, Muslim tourists, Prayer room, Japanese Muslim

### Abstract

This article focuses on the muṣallā (place of prayer) in Japan built by non-Muslim Japanese people in the spirit of “Omotenashi” hospitality for foreign Muslim tourists. Although it is a great idea to have a muṣallā for foreign Muslim visitors, there have been some problems reported as follows: 1. Muṣallā has been translated wrongly into Japanese: Kitoushitsu (祈祷室); the correct translation is Reihaisitsu (礼拝室). 2. In some muṣallā there is a place to wash a Muslim’s face, hands and feet before praying; however, because it is next to the prayer’s room, it tends to make the prayer’s room dirty. 3. A muṣallā has a qibla, an arrow to show the direction of Mecca, the sacred place in Islam; however, the qibla is not always accurate. 4. Most muṣallā are not open all day. Therefore, in summer, the fourth prayer (the prayer after sunset: al-maghrib) cannot be made within its open hours. This means foreign Muslim visitors cannot make the fourth prayer there. These problems show muṣallā in Japan often fail to meet the demands of foreign Muslim visitors, as well as Muslims living in Japan.

## 1. はじめに

この10年以上にもわたる日本政府による外国人観光客招致などの積極的な観光政策によって訪日外客数が増加している<sup>1)</sup>。各地方自治体や観光業界も率先して訪日外国人観光客への対応を行っている。その現場において、異文化理解に起因する諸問題もまた起きている。そこで、日本人がどれほど異文化を理解して対応しているのかを調査し、その実態を分析ならびに考察することが本研究の目的である。

本研究ノートでは、訪日ムスリム観光客へのおもてなし対応について取り上げる。というのも、近年訪日ムスリム観光客へのおもてなし対応の場にて様々な問題点が指摘されているためである。なお、この「おもてなし」という言葉は、近年になって観光業界でよく耳にする。2013年に開かれた国際オリンピック委員会の総会で東京オリンピック招致のスピーチの際に「おもてなし」という言葉が使用された。それ以降、観光業界において訪日観光客への心を込めた接遇を示す言葉として積極的に使用されている。日本政府が観光政策に力を注ぐ中で、訪日外国人観光客へのおもてなし対応、とりわけ、日本社会では異文化となるイスラームを宗教文化に持つムスリムたちに対する心のこもった接客方法が観光業内で注目され、また議論されることとなった。ムスリムの生活様式などの全てがイスラームの宗教教義によって規定されているため、世界中のどこにいたとしてもムスリムたちはその教えを遵守するからである。それゆえに、ムスリム観光客への対応としてイスラームを知ることが不可欠となった。そこで観光業に従事する非ムスリムの間で、その知識を得ることが急務となったのである。

観光ビジネスを通して非ムスリムが積極的にイスラームを知る機会を得たことは、イスラームという宗教文化が観光地を中心に日本各地に広まり、異文化理解の促進にもつながることになった。同時にイスラームという宗教文化の価値観にかかわる課題も露呈することになった。とりわけ、ムスリムたちが安心して飲食できるハラール食の提供が主要な課題となっていった。すなわち、提供される食のハラール性の維持やハラールの見解におけるイスラーム地域ごとの相違、そして非ムスリムのハラールに対する誤解もあって、イスラームという宗教文化の理解に様々な問題が生じている。この状況ゆえに、ハラール食については既に多くの著書や学術論文でテーマとして取り上げられている。そこで本研究ノートでは、ムスリム観光客へのおもてなし対応の中で論じられることになかったムサッラー（一時的礼拝場所）について取り上げて実際の現場を調査し、その結果を分析および考察する。

本研究テーマに関連する先行研究については以下の通りである。まずムスリム観光客が増加する中でハラール食を扱うレストランなどが増えてきたこともあって、ハラール・ビジネスに関する研究論文は小村（2019）など多数存在する。観光地や観光施設などにおけるムサッラーの調査研究については、これから研究が進む段階である。なお、金曜礼拝などのムスリム男性の義務となっている集団礼拝の際に、周辺に居住あるいは勤務するムスリムたちが参集して礼拝するムサッラーはマスジド（「モスク」のこと。以下、「マスジド」と記す）の調査研究において述べられ

ている<sup>2)</sup>。このようなモスクの調査研究において論じられるムサッラーは、100名以上の大人数が入る広さはないにせよ定期的に集団礼拝が開催される点で日常使いともいえるべき施設であり、観光客が主な利用対象者ではない。

一方で、観光地や観光施設などにおけるムサッラーは観光客が使用することを想定している。すなわち、ムスリム観光客を対象にしたムサッラーは必ずしも金曜礼拝などで定期的にムスリムが使用している施設ではない。あくまでも観光客へのサービスとしてムサッラーが設置されていることもあって、ムスリムの都合に合わせてムサッラーが開放されているわけではない。また観光客を利用対象にしたムサッラーは非ムスリムのみがその設置に関与したことがいえるため、宗教文化的な価値観の違いを問題点として露呈してもいる。さらには、こうしたムサッラーを利用しようとした滞日ムスリムや日本人改宗ムスリムが、価値観の相違にかかわる問題に直面する事態も少なからず発生している。

そこで本論文では、まずは観光地におけるムサッラーを中心に課題や問題点が何であるのかを論じ、次にいくつかの事例をあげて分析して、それによって見えてくる日本人のイスラーム理解について考察する。

なお、使い心地など非ムスリムの視点からでは判別のつかない感覚や価値観があるために、当事者となるムスリムの視点から本研究を論じるべきであると考え。そこでムサッラーの調査では、なるべく日本人改宗ムスリムに同行してもらい、使い勝手などの意見や感想を述べて頂いた。とりわけ、日本人改宗ムスリム A 氏（関東圏在住で現在 30 代）には複数のムサッラーに同行して頂き、かつ貴重な情報を提供頂いた。また、日本人改宗ムスリム B 氏（関東圏在住で現在 70 代）には国内調査への同行の他に、海外での経験談も踏まえて日本の観光地におけるムサッラーについて意見などを頂いた<sup>3)</sup>。ムサッラーの調査は、インフォーマントらの時間的な都合ゆえに、特定の期間において集中して行われたものではないが、2015 年から 2021 年の間において実施したことを付言する。

## 2. 「ムサッラー」とは何か

先述したようにムサッラーとは簡易礼拝室のことである。また、インドネシアやマレーシアでは、「ムシヨッラー (musholla)」と呼ばれている。

『岩波イスラーム辞典』によれば、ムサッラーは「一時的礼拝場所」のことである。また、モスク（同辞典では「モスク」と表記）は礼拝専用の場所であるが、ムサッラーは家屋や事務所の一区画を必要に応じて礼拝場所とするために、5 回の義務の礼拝のために常時開けられているとは限らないと同辞典では記されている。

ムサッラーもモスクもともに礼拝のための施設である。そのため常に清潔であることが共通項にあげられる。また、ムサッラーはモスクと同様に 20～30 人くらいが一度に礼拝できるような広さがあるものや、一人がやっと礼拝できるような狭い広さのものもある。では、ムサッ

ラーとモスクの違いは何かといえば、開かれている時間と内部の設置物にある。ムサッラーが開かれている時間帯は事務所や店舗が開いている時間と同じであるため、土日祝日関係なく常時開いているモスクとは異なる。例えば、レストラン内に設置されているムサッラーは店舗が開いている曜日の昼食時と夕方から夜間に使用できるといえる。さらに、ムサッラーには、モスクに設置されている「ミフラーブ」と呼ばれる聖地マッカ（「メッカ」のこと。以下、「マッカ」と記す）の方角に設けられた窪みがないため、マッカの方向を示した矢印の表示であるキブラ（以下、「キブラ」と記す）を掲示している。ムサッラーは礼拝するための部屋であるため、部屋の装飾など華美なものは求めておらず非常に簡素であることがいえる。ただし、礼拝の前に身体の特定の部位を決められた順序により流水で洗うウドゥー（以下、「ウドゥー」と記す）を行う場を設置しているところやそうでないところもある。なおモスクであれば、必ずウドゥーをする洗面所は設置される。ムサッラー内部の設置物については部屋の広さなどもかわるために様々な形態を見ることができる。

以上のような違いは見られるのだが、実際の日本のモスクの現状を鑑みると、ムサッラーと一部のモスクにはあまり違いが見られないともいえるのである。というのもモスクと称してはいるが、管理者の都合によって金曜礼拝時以外は閉まっているところが複数存在するためである<sup>4)</sup>。

では、ムサッラーとは何であろうか。先述の辞典に記されている意味を基にしていえば、ムサッラーはモスクとは異なり、開かれている時間や収容人数、あるいはウドゥーを行う水回りの設備の点が限定されている。また、その設置には既存の建造物内の空いているスペースを礼拝場所としていることがいえる。ただしイスラームの教えでは、清浄なところであればどこでも礼拝が可能であり、ムサッラーは必ずしも設置しなければならないというものではない。ゆえに、あくまでムサッラーの所有者の好意や事業者による顧客サービスとして設置されているといえるのである。

ムサッラーの設置に関してはあくまでも設置者各々の意図があり、それが利用者の意になっっているのか否かはそれぞれのムサッラーの状況、すなわち住民が利用しやすいか否か、旅行者らが臨時で礼拝を行う場合に設備などの点で利便性が高いか否かなどの判断によるところである。その点でいえば、ムサッラーは大まかに2つに分けることが可能である。一つは地域住民のために小規模ではあるが金曜礼拝などの集団礼拝ができるようにしたものであり、もう一つは観光地などにある、海外からのムスリムを利用対象者にしたものである。前者は、その多くがムスリム個人の所有地や住居、あるいはオフィスの一部をムサッラーにしている<sup>5)</sup>。また後者は海外からの観光客の姿を多く見かける空港や鉄道などの公共交通機関の施設内や観光地内に点在するレストランやホテルなどにおいて見られ、礼拝室内の表記も複数の言語で掲げられている。

### 3. 日本国内のムサッラーの現状

日本国内のムサッラーはモスクに比べてその数は現在把握できないほどに設置されていると

いえる。ムサッラーが増えた理由は、小村（2019）によれば、日本政府による訪日観光客招致政策によって東南アジアを中心としたムスリム観光客が増加したことによる。2013年には国土交通省観光庁による「ジャパン・ムスリムツーリズム・セミナー」も開催され、日本政府によるムスリム観光客への対応についての情報提供も行われた。ムサッラーは設置していなくとも、空き部屋などを礼拝のために一時的に使用すること、礼拝用の絨毯を用意すること、キブラを掲示すること、などムスリム観光客を受け入れる際に必要なことは何か、など情報共有が行われた。また、この頃から新聞雑誌あるいはインターネットでもムスリム観光客への対応について書かれた記事が次々と掲載された。例えば、日本経済新聞にはムスリム観光客へのおもてなし対応の一例として、礼拝室の設置についての記述が掲載された<sup>6)</sup>。

また都市部ではハラル・レストランが増えていった。こうしたレストランには畳1畳ほどの空間をムサッラーとしてムスリムに開放しているところもある。レストランも含めてムサッラーを数え上げようとなると、その数も把握できないほどにまで増加しているといえる。

さらに日本国内の主要観光地における駅や観光案内所のような施設内でもムサッラーが設置されるようになった。例えば、北海道千歳空港近くのショッピングモールでは敷地内で礼拝する人の姿を目にするようになったためムサッラーが設置された<sup>7)</sup>。また空港や主要ターミナル駅あるいは海外からの観光客の姿が多く見られる観光地においても、ムスリム観光客への対応としてムサッラーが設置されるようになった<sup>8)</sup>。だが、あくまでも施設内の空きスペースを利用していることもあり、ウドゥーのできる水場が設置されていないことが多い。したがって、先に公衆トイレで顔や手足を洗淨した後に、ムサッラーに行くというムスリムの行動も垣間見ることができる。

これらムサッラーは、外国人ムスリム観光客用に急造されたものである。その場しのぎで造られたものともいえよう。それゆえに様々な問題点を指摘することができる。それがどのようなものなのか、具体的な事例を次に説明する。

## 4. 事例

以下、ムサッラーの事例をいくつか取り上げる。なおムサッラーの多くは、商業施設や観光施設などの事業会社などが顧客サービスとして設置し、管理および運営しているため、固有名詞をあげることは営業妨害にもつながる。そこで、アルファベット記号をふることで、事業者の特定を回避することとする。また都道府県名および特定の都市名の記載については、観光案内所などのように都市名を記すことで事業団体が判断できることが予想される。そこで、都道府県名および都市名などを記さず、都道府県名は地域圏で、都市名はアルファベットで記載することによって事業団体の特定を避けることとする。

### 事例1 A店舗内（関東圏内）<sup>9)</sup>

2014年というムスリム観光客へのおもてなし対応が開始された初期の頃に同店舗内に設置され



た。開設時初期の頃に同ムサラーを訪れたこともあって、様々な問題点を指摘することができた。通常キブラは天井などの高い位置に掲示されるのだが、同ムサラーでは天井および床面双方に示されていた。この点には違和感を覚えた。また、調査時においては天井および床面それぞれのキブラの示す方角が微妙にずれていた点においても問題であった。さらにウドゥーができる洗面所が設置されていたが温水が出なかったため、同行の日本人改宗ムスリム A 氏によればとりわけ冬場は高齢者に厳しいだろうとの指摘があった。

#### 事例 2 B 駅（関東圏内、駅構内に設置されている）

2021年8月に訪れた。関東圏内のターミナル駅であるため、海外からのムスリム観光客のみならず、駅の利用者を想定して作られたムサラーである。複数言語による表記と部屋の内部にウドゥーのできる水回りがあるために利便性の高いムサラーである。ただし、使用するときは駅事務所の許可をもらうことと、事務所が開いている間のみ礼拝ができるということもあって、日照時間の長い夏場では、日没後からの義務の礼拝であるマグリブの礼拝時間には利用できないことがいえる。

#### 事例 3 C 市観光案内施設内（関西圏内にある観光案内所）<sup>10)</sup>

観光案内所が開いている時間帯のみ利用が可能である。インターフォンで係の人を呼び出して許可を取り、礼拝室に入る。後で詳述するが、日本人改宗ムスリム A 氏によれば、同ムサラーを利用しようとしたところ、すぐに入室できなかったという。内部はウドゥーをする水回りも設置されているが非常に狭く、礼拝する場所が水で濡れていて気になったと A 氏は感想を述べてくれた。

#### 事例 4 D 市観光案内施設内（関西圏内にある観光案内所）

2021年7月に訪れた。事例3と同様に観光案内所内に設置されているため、案内所が開かれている時のみ使用が可能である。また常時施錠されており、自由な出入りは不可能である。案内所の職員に使用を希望する旨を伝えて、名前や住所などの個人情報を明記した上で入室できる。事務所の一角を礼拝スペースにした作りであるためウドゥーができる設備はない。一人がやっと礼拝できるスペースであるが、静かで落ち着いて礼拝ができる部屋であった。

#### 事例 5 ハラル・レストラン（東京都内）<sup>11)</sup>

2010年代後半に繁華街に開店したレストランで、調査に訪れた時、従業員はほぼ全員がムスリムであった。ハラル認証も受けており、ムスリムが利用することを前提にしたレストランである。レストラン内にムサラーが設置されていたが、一人がやっと礼拝できるようなスペースであった。調査時には一人用の礼拝用絨毯がフロアに広げられていた。ウドゥーを行う水回りは設置されていなかったがムサラーの、壁を隔てた隣の部屋にトイレ用の洗面台が設けられてい

るため、そこでウドゥーをすることができる。

#### 事例6 アミューズメント施設内（関東圏内）<sup>12)</sup>

施設内の離れたスペースに間仕切りを立てて礼拝室としたものであった。天井にキブラがあり、礼拝マットもおいてあった。ウドゥーをする場合はそれほど離れていないものの、トイレ用の洗面所を使うこととなった。

#### 事例7 ホテル内（関東圏内、事前に食事の予約をすればハラール食も提供できる観光ホテル）<sup>13)</sup>

従業員によれば、ホテルの宿泊客用としてムサッラーを設置したとのことである。ただし、宿泊客は部屋でも行うことが可能なため、どちらかといえばムスリム観光客に対応しているという広告宣伝用として設置したことがいえる。礼拝室は、一家族分が一緒に礼拝できる広さがあるが室内に水回りはなく、キブラと礼拝用絨毯以外は装飾の類がないほど簡素であった。

#### 事例8 ショッピングセンター内（関東圏内）<sup>14)</sup>

現在複数の複合商業施設でムサッラーが設置されている。同ショッピングセンターでは、利用するにあたり他のムサッラーと同様に、受付で使用許可を求めるルールがある。しかしながら、A氏によれば、許可をもらうその受付がムサッラーのある場所から離れており、入室できるまでに時間がかかったという。A氏によれば、同ムサッラーの利便性に疑問を抱いているという。

なお以下、特異な事例といえるムサッラーについても言及する。関東圏内の、海外からの観光客が多く集まる都市の居酒屋店舗内にムサッラーが設置されている<sup>15)</sup>。礼拝室を示す看板は英語以外の言語でも表記されており、海外からのムスリムを利用者とした礼拝室である。ただし、居酒屋は飲酒することが目的の場所である。飲酒のみならず酒の取り扱い自体が禁止されているムスリムが居酒屋を利用することは想定外と考えねばならないことである。したがって、居酒屋にムサッラーが設置されていることは特異な事例であるといえる。

ムサッラーの設置は、あくまで訪日ムスリム観光客へのホスピタリティとして行われている。すなわち観光ビジネスにおけるサービスの一環である。ムサッラーの設置に従事するにあたっては、イスラームという宗教文化を知るプロセスが発生する。だが、あくまで顧客サービスであるために設置にあたっては必要なものさえあれば良いというマニュアル化された知識と、設置者の価値観でムサッラーが開設されていることがいえる<sup>16)</sup>。したがって、そこに利用者であるムスリムとの間に認識の違いが生じることとなるのである。

## 5. 分析として

日本人改宗ムスリムに同行して頂いて各ムサッラーの状況を調査したが、各事例に共通してい

えることを以下にまずとりあげる。まず、ムサッラーであることを示す看板についてである。看板には日本語と英語の表記あるいは英語のみの表記がある。また、いくつかのムサッラーではこれ以外にも複数言語（中国語、韓国語、アラビア語など）が表記されている<sup>17)</sup>。これは、外国人ムスリムが利用することを見込んで、複数の言語を表記していることがいえる。ただしこの翻訳をみるといくつかの問題点をあげることができる。では、どのような問題点があるのか。

まずは日本語訳の問題である。例えば、英語のみの表記であった事例5および事例7以外の、事例1から8までのムサッラーの看板表記においては全て「祈祷室」と日本語で訳されている<sup>18)</sup>。また事例のうち、アラビア語で表記されているムサッラーについては「ムサッラー」というアラビア語の単語を使用せず、日本語訳をそのまま直訳していることを指摘することができる。日本語訳については日本人ムスリムあるいはイスラームの知識人は「礼拝室」と訳している。それゆえ「祈祷室」と訳されているところは、日本人ムスリムやイスラームの知識人が設置に関与していないことがいえよう。また、アラビア語訳についてはアラビア語話者や有識者に助言を得たというよりもむしろインターネットの辞書機能を使って翻訳したのではないかと考えられる。

また各事例の共通点として、ムサッラー内にキブラを掲示していることがいえる。だが、その掲示位置にはばらつきが見られる。キブラが天井以外の所に掲示されているのは、上記の事例でいえば、事例1と事例4である。事例1については、天井面と床面の双方に掲示されているという特異な事例である。事例4は目線の位置にキブラが掲示されている。背の高い人であれば、目線を下に向けないとキブラが見えない位置である。イスラーム圏のホテルなどではキブラは天井面に掲示されているため、ムスリムはキブラを探すときに天井をまず確認する。事例1および事例4のムサッラーは、床面にしても目線の位置にしても、ムスリムの見やすさよりもむしろキブラを貼りやすい位置にしたという印象を受ける。また、ムサッラー内のキブラの指し示す方向は厳密にマッカの方向を指し示しているとは限らない。いくつかのムサッラーで、スマートフォンに入れたキブラのアプリを起動してその指し示す方向を確認したところ、数度という差ではあったが部屋のキブラとの指し示す方向がずれていた。先述したように、事例1では床面と天井面それぞれのキブラが指す方向が微妙に違っていた。この違いは、非ムスリムが設置したことを物語っているといえよう。すなわち、多少のずれはあっても仕方がない、大体の方角で良いのではないかという考えが引き起こしたと推測できる。だが、この方角のずれはムスリムたちの混乱を招くことになる。スマートフォンにキブラのアプリが入っていなければ、部屋に掲示されているキブラの方向を向いて礼拝することになる。だが、もしアプリで確認することができれば、たとえ数度の差であってもどちらを向いて良いのか迷うことになる。非ムスリムにとっては些細なことだろうが、ムスリムはイスラームについて、とくに礼拝などのムスリムにとって義務となる事柄については常に正確性を求める。なぜ正確性を求めるのかといえば、ムスリムにとってはイスラームで決められていることを遵守することが求められているからである。いくらイスラームが異文化となる国や地域に滞在していたから守れなかったとしても、なぜその時に守れなかったのか、なぜ確認しなかったのかと後悔するような、彼らの心を痛める問題となる可能性があるた



めである。こうした問題が発生するのは、ムスリム、非ムスリムそれぞれの宗教に対する姿勢や思考に基づくものであり、いわば宗教文化的な価値観の違いによるものである。

各事例の共通点を見ていくだけでも、様々な問題点が浮かび上がっている。だが、ムサッラーの個々の事例をさらに詳しく見ていくと、以下のように様々な課題をあげることができる。

### 5.1. ムサッラーの訳語について

観光地などにおけるムサッラーの多くは、ムサッラーを英語で「Prayer room」と訳して看板などに表記している。また、日本語では「祈祷室」と表記している。日本人ムスリムや日本語に精通している外国人ムスリムの間では、ムサッラーは「礼拝室」と訳されている。なぜムサッラーを「祈祷室」と訳しているのか。観光庁が編集した『ムスリムおもてなしガイドブック』には「礼拝室」と記されている。また、この「祈祷室」という訳語は日本人ムスリムの間では違和感を持たれている。日本人ムスリムが設置に関与したムサッラーが「礼拝室」と表示されていることから、本来は「礼拝室」と記されるのが正しいということになる<sup>19)</sup>。なお、『広辞苑』などの辞書を引くと、「礼拝」も「祈祷」もともに「祈り」と意味が記されていることもあって、辞書における意味では、「祈祷」も正しく誤用ではない。

また、アラビア語で「礼拝室」と表記されているムサッラーもいくつか存在するのだが、日本語の「礼拝室」をそのままアラビア語に直訳したために、“مصلی (muṣallā)”ではなく、“غرفة للصلاة (直訳では「礼拝のための部屋」という意味)”と表記されている。意味は通じたとしても正式名称ではないこともあって、アラビア語の知識はあるがムスリムの助言を得ることなく設置したことを指摘できる。

さらに、このアラビア語訳を表記することにはその必要性に疑問がわく。ムスリム観光客は主に東南アジアから来ているからである。小村（2019、pp. 192-195）によれば、東南アジア、とりわけインドネシアとマレーシアの訪日観光客が増加しており、これら2つの国はムスリムの多い地域でもあるためにムスリム観光客への対応が求められているという。その東南アジアの人々が日常使用している言語はアラビア語ではない。したがって、東南アジアのムスリムたちの言葉（先述した「musholla」）でムサッラーを表記した方が彼らにはわかりやすい。このアラビア語表記については、ムサッラーの設置にかかわった者が非ムスリムであり、「イスラーム＝アラビア語」というイメージを持っているためか、あるいはムスリムは全員アラビア語が理解できるという誤解が招いた結果であるといえよう。

### 5.2. 礼拝が推奨されない不浄な環境下のムサッラー

ムサッラーの多くが店舗や施設内の空きスペースを利用して開設されていることもあり、一人一人がやっと礼拝できるくらいの狭い空間を有したムサッラーを多く見かける。事例3のように、狭い空間であるために水回りのすぐ隣が礼拝スペースとなっているところもある。そのようなムサッラーではウドゥー後の水が飛び散っている状態で礼拝をしなければならない。ムスリムの中

にはウドゥーをした時の水が飛び散ったままの状態を不浄とみなす者もあり、この状況ならば水回りを設置しない方が良かったのではと思わせることもあるという<sup>20)</sup>。なお、先述の居酒屋の中にムサッラーが設置されている事例については、いかなるムスリムも「設置する意味がない」「論外である」という認識である。ムスリムはイスラームの教えにしたがって飲酒できないことは周知されていることである。個々のムスリムの考えにもよるが、たとえムスリム自身が飲酒をしなくとも、酒類を扱う店舗や居酒屋に入店すること自体を嫌う者はいる。したがって、このようなムスリムにとっては、飲酒するところは不浄であるという認識であり、それゆえに居酒屋に礼拝室を設置することはできないと考えるのである<sup>21)</sup>。宗教的なものは全て聖なるものであって不浄なものとは切り離す必要がある。それゆえにムスリムが上記のような認識であるのは、不浄な場に聖なるものを持ち込むことは厳禁であるという宗教的価値観によるものであるといえる。また、不浄となる居酒屋内に聖なる礼拝室を設置すること自体が、ムサッラーの設置においてムスリムの関与が全くなかったことをうかがい知ることができる。

### 5.3. キブラの掲示も含めたムサッラー内の装飾について

キブラは通常天井面に掲示されている。その理由はイスラームの聖地マッカを指し示す目印であるからである。聖なるものを人間の足元に置くことは好ましいとは思われない。ゆえに、事例1で紹介したように、床面のキブラの掲示はムスリムたちの視点では好ましいものとみなされないのである<sup>22)</sup>。また先述したように、いくつかのムサッラーのキブラは聖地マッカの方角と多少ずれて掲示されていることもあって、正確さに欠くケースも見られる。

また、ムサッラー内の装飾を華美にしているところもある。礼拝室内の装飾および絵画については、神に向かって礼拝を行うという聖なる場であることから、絵画などは飾らず簡素であることが好まれる。だがホテル内のムサッラーの中には絵画を壁にかけている事例も見られる。ムサッラー内の装飾については、日本のムスリムたちの中でも意見が分かれる。というのも、インドネシアやマレーシアにおいては柱などに植物の装飾を施した礼拝所が存在するためである。装飾については地域差があるといえよう。ただし、キブラの方角には何も飾らない方が良いとされている。関東圏のあるホテルのムサッラーでは、キブラの方角にあたる壁面に植物画を飾っている<sup>23)</sup>。動物画や人物像を飾ることは偶像崇拜にあたるために禁止されている。したがって、植物画やモザイク画などの抽象画は飾っても問題はないとみなされる傾向にあるが、ムサッラーのような礼拝を行う聖なる場所で掲示することは問題となる。たとえ植物画であっても絵画である。したがって、礼拝室に絵画があることを不快に思うムスリムがいることもまた配慮しなければならない。だが宗教的な価値観の違いゆえに、こうした問題が起きているといえよう。

### 5.4. 開かれている時間について（管理および防犯体制について）

先述したように、いくつかのムサッラーでは、店舗や事務所が開いている時間帯のみ利用が可能である。こうしたムサッラーはあくまでも顧客サービスの目的で設置されているのだが、利用

者側の都合を考えてムサッラーの開放時間を設定しているわけではない。そのために、ムスリムが利用したい時間に閉まっていることもある。礼拝時刻は太陽の位置によって変わる。そのため、5回の義務の礼拝の中で4回目となる太陽が沈んだ後に行うマグリブの礼拝は夏場には夜7時頃になる。また5回目の礼拝については、夜9時頃となる。もしムスリム観光客へのおもてなし対応としてムサッラーが設置されているのであれば、時期によって開放時間を変更することも考えるべきであるが、現状を考えると配慮が欠けているといわざるをえない。

またこれに付随していえることとして、防犯カメラが設置されているところや、防犯上常に施錠されているところ、あるいは利用するには名前や住所などの個人情報を明記するところもある。

事例3のムサッラーで日本人改宗ムスリムのA氏が礼拝のために利用許可を得ようとしたところ、パスポートの提示を求められた。日本に居住しているためパスポートは持っていないことを伝えたところ、前例がないために責任者に確かめなければならないといわれ、なかなか礼拝室に入れてもらえなかったという<sup>24)</sup>。結果としてA氏は入室できたものの、ムサッラーを管理している側の対応を考えると、日本国内に居住するムスリムや日本人ムスリムが利用することを想定していなかったことから、あくまでも訪日ムスリム観光客の利用に限定していたことがいえる。いしかれば、このムサッラーを管理している団体や管理者は日本在住のムスリムたちの存在を注視していなかったことがいえよう。

全ては管理体制や防犯体制にかかわるところである。ムサッラーは礼拝のためとはいえ、閉じられた空間となる。そのためどうしても内部の状況を知る必要がある。誰がいつどのように利用したのかを知り、問題が発生しないように管理することが求められている。管理については極めて現実的な問題ではある。だが、利便性が悪いのであれば何のためにムサッラーを開設したのか、時間に制限があるのであれば誰のための、また何のためのムサッラーであるのか、疑問が生じる。

## 6. 考察として

以上の分析を通して何がいえるのだろうか。まず、非ムスリムの者のみがムサッラーの設置に関与しているのではないかと思わせるような問題点の多いものが設置されていることを指摘できよう。いくら彼らにイスラームの知識があったとしても目的が顧客サービスとして設置することのみにあるため、利用するムスリム側の考えや利便性などについて配慮されていないことがムサッラーのあり方そのものに現れているといえよう。すなわち、ムサッラーに何が必要であるのか、その知識が十分にあったとしても、その場しのぎで造られた、利用者であるムスリムのことを考えて設置されているわけではないといえるのである。

そもそもイスラームは文化である前に宗教である。イスラームの宗教教義に基づいてムスリムの日常生活がある。彼らの社会構造や建築、芸術などの文化的要素もまたイスラームの宗教教義を基礎としている。宗教教義は周囲の事情から変えることはできない。また、時代性や地域性、その時の社会状況によっても簡単に変わるものでもない。ただし、日本の状況を見ていると、日

本社会の宗教に対する姿勢や宗教文化に対する価値観の違いから、ムスリムへのおもてなし対応と標榜しているものの、非ムスリムの都合に合わせているようにも捉えることができる。事例にも述べたムサッラーのあり方を見ていくと、ムスリムに寄り添ったものではなく、マニュアルに則ったような知識でムサッラーを開設、管理している。ムサッラーを設置することは礼拝という宗教行為そのものにかかわることであるので、イスラームの礼拝についてムスリムの考えを理解しなければ、利用者であるムスリムが満足するようなムサッラーは設置できないことになる。

そもそもイスラームの教義ではムスリムの旅行者のためにムサッラーを設置しなければならないという義務はない。礼拝は清潔なところであればどこでも礼拝をあげることができるため、あえてムサッラーという宗教施設を設置するということは、イスラームという宗教に興味を持ち、礼拝に理解を示し、またイスラームの宗教教義を知って理解した上で設置していることを意味することになる。だが、観光施設内などのムサッラーの現状を考えると、ムスリム観光客への対応として必要なものを設置すればそれで良いとする業者の意図が見られる。その点から、イスラームという宗教文化の理解というよりも観光業界のビジネスありきの姿勢を垣間見ることができるのである。

ムサッラーの訳語の問題は、イスラームという宗教文化を理解することにおいて最も問われることであろう。先述したように、ほとんどのムサッラーでは日本語訳を「礼拝室」ではなく「祈祷室」と表記している。なぜ「礼拝室」と表記すべきなのだろうか。日本人ムスリムA氏やB氏、さらにはインフォーマントとしてハラールなどの宗教教義や日本のイスラームの現状について教示頂いている日本人ムスリムC氏によれば「礼拝室」として訳すのが良いとしている。彼らにはなぜそうなのかはっきりとした根拠はないのだが、彼らは「礼拝室」と訳す理由を「感覚的な問題」だとし、また神道や仏教で使用している言葉であるからだと述べている。彼らの意見は彼らの宗教的価値観によるものである。彼らの意見を踏まえた上で「礼拝室」を訳語とする根拠について考えると、日本文化の根幹をなし、日本に古くからある神道や仏教における祈りについて考える必要があるだろう。

神道や仏教では、神主および僧侶が信徒たちのために祝詞をあげ、経をよむ。この時に「ご祈祷致します」などという言葉を使用する。神道や仏教ではイスラームとは異なり、信徒が神仏に対して直に祈りを捧げることはなく、仲介者を通すことになる。一方イスラームでは、集団礼拝の際は集団の先頭に立って礼拝を先導する者であるイマームがいる。ただし、イマームはムスリムで、礼拝の手順とクルアーンの文言さえ知っていれば誰でもなることができる。神道や仏教のように、祈りの仲介者はいない。義務である一日5回の礼拝だけでなく、願いの祈りを捧げる時もまたムスリムは神に対して直に祈りを捧げる。さらに、「祈祷」という言葉には辞書に記されている意味として、神仏に対して言葉によって除災増福を祈るという意味がある。したがって、神道や仏教と祈りの形態が異なることから、神道や仏教と切り離すためにムスリムたちは「祈祷」ではなく「礼拝」という言葉を使用していることがいえる。では、なぜ多くのムサッラーが「祈

「祈室」という訳語を使用しているのか。神道や仏教からの影響を強く受けているということなのだろうか。なお、仏教では「祈祷」という言葉の前には「加持」という言葉を付けて、「加持祈祷」という言葉を使用する。「礼拝（仏教では「らいはい」と発音）」という言葉も仏教では常用する。このムサッラーの日本語訳については神道や仏教の視点から更なる調査を要する。

また、ムスリムが不快と思われるようなムサッラーの内部状況についても設置者の宗教文化における価値観を垣間見ることができる。なお、公共交通機関や観光施設などが設置した礼拝室の中には、利用者はムスリムだけでなく、他宗教の信徒も礼拝のために使用できる多目的部屋として造られているところもあるという<sup>25)</sup>。だが、他宗教の信徒が使用した礼拝室でムスリムは礼拝をあげることができるだろうか。というのも、ムスリムにとっては他宗教が祈りをあげた場所は不浄な場とみなすからである。前述したように、礼拝は清浄な場所で行わなければならない。では清浄な場所とはどのような場所であるのか。単純に掃除が行き届いているということではない。分析でも述べたように、ムスリムにとって不浄な場所は、水で濡れているなどの物理的に汚れているだけでなく、居酒屋のようなイスラームで禁止されているような行為が行われる場所のことである。それは他宗教が礼拝した同じ場所でイスラームの礼拝をあげることと同様である。すなわち、ウドゥーのための水回りやキブラを有したイスラームの礼拝室であるムサッラーとして開設する一方で他宗教の信徒も利用できるということは、ムスリムにとって気分の良いものではない。このような部屋の使用は、非ムスリムの宗教感覚や価値観によるものではないだろうか。ムスリムにとって少しでも不快に思う場所が不浄な場となることを考えれば、ムスリムが他宗教の信徒が使用することを想定することはしないだろう。したがって、この点においては、設置者の宗教感覚や価値観の問題であるといえる。また、宗教感覚や価値観の問題とするならば、ムサッラーの設置には、非ムスリムと日本のムスリム、あるいは日本人ムスリムとの協働で行うことが問題を解決する方法であるといえる。

## 7. おわりに

観光地内の店舗や観光施設におけるムサッラーは、顧客サービスとして設置されていることは理解できる。しかしながら、ムサッラーの状況を分析してみると、そこには非ムスリムの日本人によるイスラームという宗教文化の理解の程度を垣間見ることができる。すなわち、ハラール・ビジネスと同様に、ムサッラーの設置においてもまたビジネスありきの対応で、イスラームという宗教文化を理解しなくとも「こうあるべきだ」というマニュアルともいえるべき知識や考えが存在しているといえる。その上、イスラームに対する誤った見方や思考に基づいてムサッラーを設置している。また設置者の宗教的・文化的価値観が影響しているために、ムスリムにとっては不快であり不便であることが設置されたムサッラーに表れて、問題点として露呈しているといえる。「祈室」という日本語訳の問題、キブラの微妙なずれの問題など、なぜ片手間に設置をするのかという疑問もまた残る。



こうした日本のムサッラーの現状を考えると、日本人のイスラームという宗教文化の理解は、ムスリムとの間の宗教的・文化的価値観の相違によるものであるといえよう。ただこの点については価値観の相違を明確にする必要がある。それは今後の調査研究課題であるといえる。

ムサッラーが日本各地の観光地などに増えていくことは、非ムスリムの日本人がイスラームという宗教文化を知って理解するきっかけとなるだろう。それゆえに、ムスリム側もイスラームを知って理解するきっかけを潰したくないことから、あくまでもないよりはましであるとして利用に不都合を感じたとしてもそれ以上は求めないのかもしれない。だが、ムサッラーは様々なムスリムが利用する。観光客のみが使用するものではない。地元のムスリムたちも、そして出張など出先で落ち着いた場所で礼拝するためにムサッラーを利用する者もいる。こうした現状を鑑みると、ムサッラーの設置には日本国内のムスリムたちの利用も含めて熟考すべく課題が山積していることがいえる。

今後も日本政府が観光政策に力を入れる限りは、訪日外国人観光客は増加するだろう。またそれに伴い、ムサッラーの設置においてどのような議論が高まってくるのか、ムスリム側および業者側それぞれの動向を見ていく必要があるといえよう。

## 注

- 1) 日本政府観光局「日本の観光統計データ 年別 訪日外客数の推移」より。https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--transition (2021年9月7日アクセス)。なお2020年は、コロナ禍によって訪日外客数は前年比90パーセント以上のマイナス値となった。2021年も2019年以前と比較するとマイナス値を計上しているが、2020年および2021年が特別な状況であることを考慮する必要がある。
- 2) なお、地方自治や多文化共生社会の視点からマスジドについて論じられたものは、(Abdelrahim 2019) や (店田 2019) など複数存在する。
- 3) 本来であれば、訪日ムスリム観光客にも聞き取り調査をするべきであるが、イスラームの教義では旅行者は1日5回の義務の礼拝を3回にまとめて行うことができる規定があるため、彼らが必ずしも観光地に開設されているムサッラーを使うとは限らないこと、ゆえにムサッラーを利用するムスリム観光客に出会うことが難しいこと、国内出張や近隣に住んでおり買い物で立ち寄ったなどの理由からムサッラーを利用する滞日ムスリムや日本人改宗ムスリムが複数いたことから、日本人改宗ムスリムに調査に同行頂いた。また同行頂いた日本人改宗ムスリムたちについては、彼らが今後ムサッラーを使用するにあたって支障がないようにするために、個人が特定できないように記載している。また訪問日についても、いくつかのムサッラーで個人情報を書き記して入室していることから、ムスリムが誰であるのか特定される恐れがあるため、無記載としている。
- 4) 例えば、山梨県甲府市内にある甲府マスジドである。2018年の調査時点では、同マスジドは金曜礼拝時には礼拝時間になると開いていたが、それ以外はマスジドの鍵を所持する管理人の不在が多いために常時開かれていなかった。
- 5) 例えば、香川県高松市内にあった高松ムサッラーなどである。

- 6) 日本経済新聞「世界呼び込む日本改造(下) 異文化バリアフリー、「祈祷室」設置でムスリム誘致」を参照。 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO86830010V10C15A5000000/> (2021年9月6日アクセス)。
- 7) 『読売新聞』2012.9.2朝刊、北海道版、32面より。
- 8) Yahoo!News「ショッピングモールや駅で「礼拝室」が増加中 異なる宗教、文化への関心呼び起こしのきっかけに」 <https://news.yahoo.co.jp/articles/1fda3e8c21bc1980eb45642d848c8ba741b03a62?page=1> (2021年9月6日アクセス)。
- 9) 2015年6月に調査。日本人改宗ムスリムA氏の同行あり。
- 10) 2015年同施設を利用した日本人改宗ムスリムA氏へのインタビューによる。
- 11) 2016年11月、A氏に同行頂いて調査した。
- 12) 2015年3月、日本人改宗ムスリムA氏に同行頂いて調査した。
- 13) 2018年7月、日本人改宗ムスリムB氏に同行頂いて調査した。
- 14) 2021年9月13日、日本人改宗ムスリムA氏へのオンラインインタビューによる。
- 15) その特異性ゆえに地域名を書くと特定できる可能性があるために営業妨害と捉えられてしまう恐れがある。そこで地域名も伏せて記載する。
- 16) 業界におけるマニュアルに関連していえば、観光庁や地方自治体によってムスリム観光客への対応についての情報提供が行われている。例えば、観光庁のホームページに掲載されている『ムスリムおもてなしガイドブック』をあげることができる。同ガイドブックは、有識者や観光業界の意見を取りまとめ、さらに日本国内のムスリム留学生やイスラーム圏の旅行会社の要望を反映して観光庁によって編集された冊子である。イスラームの教えの解釈や実践方法は宗派や国、地域、文化、個人によって違いがあることや、アラビア語の発音にしたがってイスラーム用語を記載しているなど、ムスリムの考えに基づきながら書かれているといえる。
- 17) なお、なぜ中国語や韓国語の訳がついているのかといえば、観光業界では訪日外客に対する表記として4言語(日本語・英語・中国語・韓国語)による表記が標準となっているためである。
- 18) なお、事例7のムサッラーについては、英語表記のみであったが、従業員は「祈祷室」ではなく「礼拝室」と呼んでいた。
- 19) 北海道の千歳空港近くにある商業施設内に設置されているムサッラーは、「礼拝室」と訳されている。
- 20) 2021年9月13日、日本人改宗ムスリムA氏へのオンラインインタビューによる。
- 21) 日本在住のインドネシア人女性ムスリム(留学生として2013年来日。2015年インタビュー当時30代前半)は、ムサッラーを見たいという興味はあるが、そもそも居酒屋に来てまで礼拝するという行為はしないだろうと意見を述べている。
- 22) なお、この点に関連して、聖典クルアーンもまた唯一神の言葉が書かれているために床面に置かず棚の高い位置におくべきと考えるムスリムもいる。
- 23) 2021年9月13日、日本人改宗ムスリムA氏へのインタビューによる。
- 24) 2016年3月20日、都内でのA氏に対するインタビューによる。
- 25) 日本経済新聞「世界呼び込む日本改造(下) 異文化バリアフリー、「祈祷室」設置でムスリム誘致」より。 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO86830010V10C15A5000000/> (2021年9月6日アクセス)。なお、記事によれば、宗教上の理由であれば、ムスリム以外も利用できると述べている。

### 参考文献

- Abdelrahim, E. (2019) 「日本における Masjid の増加：茨木 Masjid 内部の視点から」『宗教と社会貢献』9(1)、1-30.
- 観光庁 (2018) 「ムスリムおもてなしガイドブック ムスリム旅行者受入環境の向上を目指して」  
<https://www.mlit.go.jp/common/001101142.pdf> (2021年10月20日アクセス)
- 小村明子 (2019) 『日本のイスラーム：歴史・宗教・文化を読み解く』朝日新聞出版
- SankeiBiz (2019年3月7日配信) 「ムスリム「礼拝室」増加中 日本の商業施設など対応に苦慮」  
<https://www.sankeibiz.jp/macro/news/190307/mcb1903070500009-n1.htm> (2021年9月6日アクセス)
- 店田廣文 (2019) 「研究ノート 地方自治体におけるムスリム住民に対する「多文化共生」施策の現状」『人間科学研究』32(2)、225-234.
- 日本経済新聞 (2015年5月28日配信) 「世界呼び込む日本改造(下) 異文化バリアフリー、「祈祷室」設置でムスリム誘致」  
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO86830010V10C15A5000000/>  
(2021年9月6日アクセス)
- 日本政府観光局 (2021) 「日本の観光統計データ 年別 訪日外客数の推移」  
<https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound--travelers--transition> (2021年9月7日アクセス)
- Yahoo!News (2020年1月29日配信) 「ショッピングモールや駅で「礼拝室」が増加中 異なる宗教、文化への関心呼び起こしのきっかけに」  
<https://news.yahoo.co.jp/articles/1fda3e8c21bc1980eb45642d848c8ba741b03a62?page=1> (2021年9月6日アクセス)
- 読売新聞 2012年9月2日朝刊、北海道版「千歳レラ 礼拝室新設へ 東南アジア旅行者増え」32面。